

Topic 01 令和7年度 熊本大学教職大学院スタート



熊本大学教職大学院は9年目を迎えました。今年度は、「学校教育実践高度化コース」「教科教育実践高度化コース」「特別支援教育実践高度化コース」に加えて、「教育の国際化実践高度化コース」を設立しました。この新たな4コースに、ストレートマスター25人、現職教員6人、教員経験者1人、合計32人が入学しました。

「理論と実践の往還」を「教育研究を推進する核」とし、学校現場での実践に身を置きながら学びを深めると共に、現職教員とストレートマスターが、経験や教科、校種の違いを生かしながら、高度な教育実践力を習得していきます。



自ら問い、自ら考え、 自ら学ぶ教育課程の充実

教育学研究科長 藤田 豊

教育学研究科長の藤田です。教職大学院に4番目のコース「教育の国際化実践高度化コース」が誕生しました。次期学習指導要領改訂に向けた議論も始まっています。教職大学院の教育研究機能をより一層強化し、「理論と実践の往還」をその推進力に、大学院生一人ひとりが常に学校現場での実践に身を置きながら、教員スタッフと連携協働し、仲間と支え合いながら、自ら問い、自ら考え、自ら学ぶ教育課程を充実させて参ります。

Topic 02 授業紹介

「21世紀型能力」を育成する 協働的な学びの授業デザイン

「協働的な学び」とは何かと考えるときに、ペアやグループでの活動を思い浮かべるのではないのでしょうか。この講義では、協働的な学びの表面的な形式や方法の理解ではなく、その理論的、学術的背景を学ぶことができます。どのような状況で協働的な学びの効果が発揮されるのか、議論を中心としながら学んでいきます。理論に裏付けされた協働的な学びを実施することができれば、これまで以上に子供たちの理解を深めることが期待できると感じています。



PI 中島 康智

Topic 03 研究紹介

若手教員における主体的な学びの 素地形成を促す省察の役割

「教師の学びの姿も、子供の学びの相似形」と言われるように、教師自身にも主体的な学びが求められています。本研究では、そのような背景を踏まえ、省察の役割に着目しました。特に、コルトハーゲンのALACTモデルを活用し、若手教員が協働的なリフレクションを通して本質的な諸相にどのように気づいていくのかを調査していきます。継続的な省察を重ねることで、若手教員が授業について考える楽しさ(知的好奇心)や良い授業ができるようになったという実感(有能感)を得ていくことを目指します。最終的には「目標の設定→見通し→実行→振り返り」という主体的な学びのサイクルを、若手教員自身が自律的に回していく姿を目指していきます。



P2 一安 尊正